

五 尊重すべき現在の一念

「諸の悪を作す莫れ、衆の善を奉け行へよ、自ら其の意を清くするは、是れ諸の佛の教なり」心を清淨にするのが、即ち佛の御教であります。云何したならば心が淨くなるか。悪を離れて善を行ふたらばよい。自ら努力して、廢惡修善するがよい。「圓融至徳の嘉號は、悪を轉じて徳となす正智」。信仰によつて轉惡成善の益を蒙るもよい。「あさみどり澄みわたりたる大空の、ひろきをおのが心ともがな」(先帝)心は廣く清くなくてはなりません。

處で、この世界を欲界と名づける。謂ふころろは三欲に耽るが故にと。食欲、淫欲、睡眠欲、即ち食氣と色氣と眠氣と、此の三の欲である。孰もなくはならぬものだが、得て過り易い。睡眠欲は少年時代に多く、怠惰を意味し、淫欲は中年時代に激しく、性欲の跳梁を意味し、食欲は老年時代に多く、年寄りは食ひ力と云つた風に、若い時に嫌ひであつたものも、段々と好きになるという調子。武士は食はねど高楊子と云ふ、けれども食はずに戦争は出來ぬ酒と女は敵と云つても、無くては子孫が繁榮せぬ。片山博士は、子供は四人持たねば國民たるの義務が濟まぬと申されるさうなが、いくら英雄豪傑でも紳士公卿でも、これだけはお一人では叶ひませぬ。二十四時間勤務は五年も十年も續けられるものでない。機械にも油を注さねばならぬ如く、人にも休息が要ります。さればこの三欲は適度に使用して、其の規を越えないやう、その立場を過らないやうにするのです。それには現在に満足し安住するのです。

織田信長公と云へば、誰知らぬ者もない、戦國時代の英雄で、一時は殆んど天下を取つて居た、有名な將軍であります。この將軍が一時天下に覇を稱して、天晴の將軍となりすまし、自分の生れ故郷に乗り込みました。時に、

この村内に自分と、同年同月同日に生れたものがあるならば、出て来いとの
布令を出した。ところが、係りの役人、色々に探索の結果。信長公と同日生
れの男と云つては、一人しかない。漸く見付け出した。實は如何とは思つた
けれども、御意とあるからには致方がない。信長公の御前に罷り出ることに
なりました。すると信長公。はてどんな男か知ら、天下の將軍と云つては自
分一人だけでも、苟くも自分と同村に同年同月同日生れの男としてみれ
ば少くとも郡役人か庄屋位の身分ある者であらうと、力味んで居らるゝ處
へ、出て来たのは、豈計らんや、乞食の見すばらしい親爺であつた。尾羽打ち
枯らして、身にはボロぐになつた破れ着物を着て居る。これを見た信長公
「ホウ 某が自分と同月同日に生れたためでたい男であるか、見れば餘程
貧乏に苦んで居る様子、自分は今日天下の將軍となつたのに、同じ年同じ月
日に生れながら、人にはこれ程の隔りがあるかのう」。

聊か不憫に思つて居られますと、男はへ、いと笑つて申します。「仰せ御尤
ものやうで御座いますが、併し詮じつまつた處、貴殿と私とはたつた一日
の違ひだけであります」。「それは云何したこと」。「さらばで御座います、貴
殿は天下の將軍でお威張りでありますけれども、明日はどんな不幸に出遇う
て、食ふや食はずの難儀をなさらなければならぬとも限らぬ。私も亦今日
こそ、こんな淺間しい乞食の身でありますけれども、明日はどうして玉の御輿
に乗るやうな、幸運な身になるのかも分りませぬ。昨日までの事は最早濟ん
だことで、嬉しかつたと云ふも辛かつたと云ふも、皆夢であります。明日か
ら後の事は、其日になつて見ないと、何とも薩張り分らぬことであります。
して見れば將軍様と云ふのも乞食と云ふのも、僅か今日一日の違ひではあり
ませんか」。聞いて信長公は、成程これは尤な話であると、手を打つて感心

し、御褒美として仰山な御手元金を下さった。が結局はこの親爺の方が果報であつた。信長公は間もなく自分の家來の明智光秀のために殺されて仕舞ひ親爺は思がけない澤山な金に有りついて、一生長く呑氣な日暮をしたさうだ。

あゝ現在の一念よ、忽にすべからざる現在の一念よ。私共は徒に過去の追懷に耽り、妄に未來の豫想に憧れて、努むべき現在を等閑に附してはゐないか。却下を見よ、昨日は過ぎて明日は來らず、私共の正しく接して居るのは、現在の一念であります。今日一日と思へばこそ、現在の一念に就いて、己が精力のあらん限りを傾注し、爲すべきを爲し、勤むべきを勤むる。今は遊んで居ても末に働かう、今は善いことをせずとも後に善いことせうなど、そんな呑氣な事は云うて居られませぬ。如來の救濟も、過去の昔でなく未來の臨終でなく、唯現在の私の心に、大悲の遺瀨ない仰せ一つが引受けられて、念々に喜びく念佛するばかりである。現に罪惡生死の凡夫が、現に彼の願力に乗じて居るのであります。そして刻々に無礙の一道を歩ませ

て頂いて居ます。